



TITLE:

[書評]ロジェ・シャルティエ『アン
シャン・レジーム下のフランスに
おける読書と読者』

AUTHOR(S):

多賀, 茂

CITATION:

多賀, 茂. [書評]ロジェ・シャルティエ『アンシャン・レジーム下のフ
ランスにおける読書と読者』. 仏文研究 1989, 20: 145-147

ISSUE DATE:

1989-09-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/137747>

RIGHT:

ロジェ・シャルティエ

『アンシャン・レジーム下のフランスにおける読書と読者』

Roger CHARTIER, *Lectures et lecteurs*
dans la France d'Ancien Régime, Seuil, 1987.

多 賀 茂

アナル派歴史学の紹介が、日本でも大分進んできた。以前から邦訳のあった、M. ブロック、Ph. アリエスらに加え、F. プロードル、G. デュビ、J.-L. フランドランらの翻訳が、どんどん現われている。今後更にこの傾向は続くだろう。

アナル派の歴史学の特徴といえば、長期的歴史 *histoire de la longue durée* という視点によるアプローチ、精神構造 *mentalité* の漸次的変化という根本的テーマ、そして、民衆の信仰、祭り、食生活等、従来民族学が扱ってきた対象の歴史化、ということが重要なものだろう。しかし、これらの特徴が、最初から明確に存在したわけではない。地方経済・地方社会の歴史的研究の中から、先ず、自と長期的な視点で成立し（ブロック、L. フェーヴルからプロードルまで）、それに、民族学的対象によって民衆の精神構造の変化を探るという研究法が加わる（J. ル・ゴフ、デュビ、アリエス等）。同時に、経済学の影響から、歴史的变化の数量化も試みられた（E. ル・ロワ・ラデュリ等）。という具合で、今やフランスの歴史学の代名詞ともなった観のあるこの一派は、そもそも1920年代（日本でいえば、昭和の初年頃）にその第一歩を記しているものであり、いわば、この学派の歩みそのものが「長期的」なのである。まるで、無数の才能が寄り集まってできた巨象がゆっくりと歩いているようなもので、我々はまだ、その目がどうだ、耳がどうだ、ということを知っているに過ぎない。

で、今回は鼻先を切り売りさせて頂く。

ロジェ・シャルティエという人は、現在、アナル派の若い世代の中心人物の一人と目されている。実際、筆者が、アナル派の本拠地であるオートゼチュド *l'Ecole pratique des hautes études* 第六部門の授業を幾つか受けた頃（1987-88）、一番活気のあったのが、この人と、もう一人ジャック・ルヴェル Jacques REVEL という人の授業だった。両者とも、読書・出版・美術・言語等、従来から狭義での文化という概念に入っていたテーマに、新たに取り組んでいるところが共通していた。

いずれにしても、これ程の歴史的重みを持った学派に属する学者は、外からの影響に対してと同時に、派の内部の過去と現在に対して、自分を常に位置づけていなければならないだろう。その意味で、今回紹介させて頂くシャルティエ氏の本は、決して十全な論証を尽くした研究書ではないが、アナル派の最先端にいる人が、何を意識して仕事をし、何に苦勞をしているかが、割合に生に出てきていておもしろい。

さて、この本は実際には、氏がいろいろな所で発表してきた論文を集めたものである。全体を貫くテーマは、アンシャン・レジーム期のフランスにおいて、書物や法令等の様々な形で、印刷され、流布したものが、社会の構造の異なった切断面においてどういう機能を担い、どういう文化構造につながっていたか、ということだが、氏はそれを二つの観点から追求している。印刷されたものがそのまま何らかの行為に結びついて、言語学という「遂行的」な性格を持つ場合と、大衆向け出版物の文化の場合がそれで、前者については、祭りの規制令、行儀作法の書、臨終準備の書、後者については、ヒブリオテック・ブルー

という大衆向け廉価版叢書の出版法、その一大中心テーマだった乞食ないし悪党小説の特徴等が取り上げられている。又、書かれたものが出版する側と受けとる側で、どのような形態をとるかということも、列挙して考察されている。幾つかの章だけまとめておこう。

先ず、第一章。シャルティエ氏は、民衆の伝統的な祭りを制限、禁止しようとする政府の法令、教会の意見書が、数多く出されていることに注目する。これらの出版物がどういう働きを担っていたか。勿論、祭りの時の大混乱、エネルギーの無秩序な発散が、民衆の上に立つ者、即ち政府と教会にとっては脅威であり、それを制限することが目的であることは明白であるが、シャルティエ氏は、その同じ祭りが、教会にとっては民衆を教化して、正統的なカトリックの信仰を行き渡らせるための、又、政府にとっては中央集権の統治の意味を民衆に体得させるための、格好の機会であったことを指摘する。このような思わくが、民衆の上に立つ側にあったからこそ、十七・十八世紀を通じて、繰り返し繰り返し、様々な法令や意見書が祭りに関して出されているのである。アンシャン・レージュム下のフランスにおいて、祭りは民間の伝統的な文化と統治者側の文化という二つの異なった文化が出会う場所だったのである。

また、こうした祭りをめぐる民衆と支配者側との力の均衡が、大革命によって、特にその最中のお祭り騒ぎによって、破られてしまい、その後かえってかつてのようなエネルギーの爆発を伴う祭りが減少したということもおもしろい指摘だと思う。

第二章では、行儀作法に関する書物を取り上げている。このテーマは『文明化の過程』という大作において、N. エリアスが既に扱っているが、シャルティエ氏は、どういう書物が出版されたかという点に重点を置き、その読解を通じて、行儀作法 *civilité* という概念が、特に礼儀 *politesse* というよく似た概念との対立の中で、どう変化したかを追求している。

フランスの行儀作法教育の源には、エラスムスの『子供の行儀について *La Civilité puérile*』(の仏訳)がある。この本を貫いているのは、見えているもの(作法、身だしなみ等)は見えていないもの(魂)の忠実な反映である、或いは、両者に区別はない、とする古典的世界観だ、とシャルティエ氏は言う。これに対し、カスティリオーネの『宮廷人』に源を発する、宮廷社会での *civilité* (この場合は、礼儀という方が近いだろう)についての書物は、見かけと本質に差のあることを前提とし、両者の緊張関係の上に成り立つバロックの世界観に貫かれている。この二つの相異なった世界観を折衷した、或いは、後者の側から前者への歩み寄りを試みたのが、大ベストセラー、アントワーヌ・ド・クルタン Antoine de COURTIN の *Nouveau Traité de la civilité qui se pratique en France parmi les honnêtes gens* であり、1671年から1930年の間に十五版を重ねることになる。勿論、他に同傾向の書物が幾つも出版された。

十八世紀になると、この状況に二つの新しい傾向が加わる。先ず、1703年に出版された、ラ・サール Jean-Baptiste de LA SALLE の *Les Règles de la bienséance et de la civilité chrétienne*。この本では、行儀は神の讃美の一つの形として定義され、魂の忠実な反映とされる。そしてその意味で、キリスト教的修身としての行儀教育は、エラスムスの伝統へと回帰する。

一方、同じ十八世紀には、トロワ Troyes の町に本拠を置く、ウド Oudot、ガルニエ Garnier 等の出版社によって、大衆版の行儀作法の書が数多く出される。行儀 *civilité* という概念は大衆に広がるが、そこでは、社会的階級区別内での徳という面が強くなり、同時に、大衆化の逆作用として、知識層の間に行儀を蔑視する風潮が生まれた。しかし知識層の中では、モンテスキューの思想の影響のもとで、*civilité* を文明化のしるしとして、社会的価値に過ぎない *politesse* から区別する傾向も現われ、ルソー等も同様の認識の上に立つ。

大革命の進行中、*civilité* は再び普遍的要請として、社会的階級とは離れてとらえられるが、全体の流れは、シャルティエ氏によれば *civilité* を社会生活の中での適応の技術と考える方向に進んでいる。十九世紀にはいつてこの傾向は更に進み、*politesse* という言葉の方が上位に置かれるようになる。行儀 *civilité* は、もはや倫理上・宗教上の普遍的な生活規範でなくなり、近代社会の中で適応して生きていくための最低限の規則に過ぎなくなったのである。

もう一章だけ紹介しておこう。既に出てきたトロワの出版社による廉価版大衆本、ビブリオテック・ブルーに、シャルティエ氏は大きな意味合いを認めているので、これについて概略的に述べた第七章を見ておきたい。

十七世紀以来、トロワのウドやガルニエ等の出版社が大量に出版した大衆本のジャンル別内わけは、例えば十八世紀後半のガルニエ社の資料によれば、宗教関係42.7%、フィクション28.8%、実用書26.8%であり、シャルティエ氏は、反宗教改革の運動の延長の中で、この叢書が民衆の教化に関して果たした役割は大きかったと見ている。

又、出版されるテキストは、すべて既存のテキストの縮約版だが、ただ短くなっているというだけでなく、細切れになっているという特徴がある。これは、この叢書が想定している読者が、長い読書に慣れていない人々だということによるが、本の頭や最後に版画を置いて、一つの教訓を強調しておこうとしているのも、同様の読者を想定していることによる。宗教関係では、聖書の他に、祈りの言葉を集めたもの、日課を説明したもの等色々あり、フィクションでは、おとぎ話と乞食・悪党小説（これについては第八章で詳しく述べられている）が二大ジャンルであった。

しかも、こうした大衆本の文化は、十八世紀に、行商人 *colporteurs* によって農村部へと飛躍的に浸透し、鉄道の発達によって書物の流通システムが変わってしまう二十世紀初頭まで綿々と続くのである。

以上、三つの章だけ紹介したが、この本全体を通じて、最初に挙げたアナル派の特徴を指摘することができる。まず、十六世紀から十八世紀末（場合によっては十九世紀）までという長期的な視点で問題を見ていること。印刷されたものを対象とするといっても、特に、祭りや行儀や死や、又、大衆本といった民族学的対象からアプローチしていること。出版社の印刷数や、個人の書物所有状況（死後の財産目録による）の調査によって、歴史的状況の数量化も計っていること。等々。筆者の目にはシャルティエ氏がかなり意識的にアナル派の特徴を並べていると見えた。

しかし、もっとシャルティエ氏が意識しているように見えるものがある。ある箇所では、「一つの文化を記述するとは、その文化の中で結びあわされている諸々の関係の全体、その文化において、世界や社会や聖なるものを表象している諸々の行為の総体を理解することである」と述べているが、筆者には、こうした語り口の背後には、ミシェル・フーコーがいるように思われる。実際、古い資料の発掘を通じて、過去の社会を構成した諸々の力の関係の連関を明らかにする必要性を示したフーコーの仕事は、アナル派の若い世代の人達に非常に大きな影響を及ぼしている。それがあつたためにシャルティエ氏も、この本で、小テーマを少しずつ積み上げて、ことさら慎重な態度をとっているのだろう。（こうした影響関係の最も直接的な発現の一つは、既に故人となつた、ミシェル・ド・セルトー *Michel de CERTEAU* の *L'Écriture de l'histoire* である。）

従つて、古資料の発掘・調査は、決してエピソードの発掘を目指したものではない。この本でも、途中、マリー・アントワネットの行列を見るために集まつた群衆が将棋倒しになつて多くの怪我人が出、その記録の中に、各人のその時の所持品も記されていたことが言及されているが、その中の一人の老人は、ポケットの中に廉価版聖書を持っていた。非常に雄弁なイメージであるが、真面目な学問はここで終わつてはならないだろう。シャルティエ氏も重々承知しているように、ある老人がマリー・アントワネットを見に来て、その時、ポケットに聖書がはいっていた、という状況を可能にする条件こそが明らかにされるべきものだろう。そして、シャルティエ氏が使つてみせるアナル派の方法は、これに答えるに十分有力であると筆者は思った。

（和歌山大学他非常勤講師）